

【産経抄】「万世一系」の危機だった！「男系男子による皇位継承は女性差別」国連女子差別撤廃委に知恵をつけたのは誰だ

戦後60年にあたる平成17年、小紙は外務省の秘密文書を入手した。昭和23年10月に作成された『皇室に関する諸制度の民主化』である。占領下の日本でGHQ（連合軍総司令部）が、いかに皇室の弱体化に腐心したのか、詳細に記されていた。

当時GHQ内では、皇位継承を男子に限っているのは、男女平等に照らして疑問だ、との声が上がっていた。ただ文書には、「日本の歴史上女帝に弊害の伴った事例等を説明した結果、司令部側はこれを固執しなかった」とある。

「弊害」のなかには、当然「道鏡事件」が含まれている。女帝・称徳天皇に寵愛（ちようあい）された僧・道鏡は766年に法王となった。「道鏡を天皇にすべし」。ついには九州の宇佐八幡宮から神託が届いたとして、皇位につこうとする。真偽を確かめるために派遣された和氣清麻呂が、逆の神託を得て、道鏡の野望を打ち砕いた。

天皇の「万世一系」が損なわれる、最大の危機だった。この事件を教訓にして、朝廷は「男系」の原則維持にことさら努めるようになる。皇位継承はもともと、男女平等論の立場から論ずべきではない。

そのデリケートな問題に、国連女子差別撤廃委員会が、口をはさもうとしている。「男系男子による皇位継承は女性差別」。今月7日に発表された日本に対する勧告に、あやうくこんな内容が盛り込まれるところだった。勧告をとりまとめた委員は中国人の活動家だという。

すでに委員会は、慰安婦問題をめぐって、何とか日本の名誉を貶（おとし）めようとする「歴史戦」の舞台となっている。日本人活動家の影もちらつく。外国人の委員に皇室について、深い知識があるとは考えにくい。知恵をつけたのはひょっとして、想像するだけで憂鬱になる。